# 自恃の精神

「井上成美　阿川弘之著　新潮文庫」を読んでいて、「自恃の精神、二十年三十年の将来大木に成長すべき人材のポテンシャルを持たせるに当たって……」の一文に出会った。江田島の海軍兵学校の校長井上成美の教育方針「敗戦後の日本を建て直す人材を育てるんだ」を端的に表現している、と読んだ。

「自恃の精神」、高瀬高校の２・３年時の学級担任牧忠雄先生から教わって以来、一度もお目にかかっていない懐かしい言葉だった。念のため新明解国語辞典（三省堂）を引いた。「自分で自分（だけ）を頼みとすること」とあった。

高校教師の現職時、精神的に疲れてくると、牧先生を訪ねていた。牧先生と話していると、知らぬ間に元気が湧いてきているのだった。定年前の６年間校長を拝命したが、その間は度々お邪魔した。



もう３０年以上前になる。ある日、「小野よ、もう年に不足はないぞ。自恃の精神はもう十分に身に付いているじゃろ」と言われた。「自恃の精神」という言葉は聞き初めだった。私が怪訝な顔をしていたのだろう。

「自恃の精神とは、自分で自分だけを頼みとすることじゃよ。最後に頼れるのは自分だけなんだ。もうしっかりと自覚せないかんぞ」

「ここへ「えいち」と書いてみ」と用紙を渡された。「英知」と書くと、

「小野もそう書くんか。ボクはその「えいち」は好かん」

「ひえいざんの「えい」な。あの字は読めるけどよう書かんわ」

「ボクは、「ト、ワ、一、ハ、人の目、又」と覚えとる。正しくは「叡智」と書くんぞ」

こんな会話をよくした。懐かしい思い出である。

「自恃の精神」を読んだ途端に頭に浮かんできたのは、定年退職した翌年、

平成１３（２００１）年３月、ウズベキスタン共和国へ教育改革政策アドバイザーとして文科省から私一人派遣された時のことだった。

ウズベキスタンはソ連崩壊によって１９９１年８月に誕生した新しい国、当時日本人には全く未知の国だった。そんな中、カリモフ大統領が来日して、森総理大臣へ、日本の農業高校のような学校を作りたいから支援してほしいと依頼された。援助に値する国かどうか調査するのが私の任務だった。

到着初日、３月２日に文部省へ挨拶に行った。応対してくれたのはクチュクバエフ副大臣だった。私が簡単に自己紹介をして、来ウの目的を一言伝えると、私の話をそれ以上聞こうとしないで、「何しに来たのか。ウズベキスタンには優秀な人材は揃っている。人は要らない。しなければならないことは山ほどあるのにお金が無いんだ。お金が無いから困っているんだ……」と喋り続ける。



通訳は東洋大学４年生で女性のニルファル、彼女に「まずは私の来ウの目的・任務をもう少し詳しく聞いてもらいたいんだ。クチュクバエフ副大臣に伝えてくれないか」と告げた。ここで黙っていてはいけない。「自恃の精神だ」と自覚したのだった。

「ウズベキスタンは日本には現在全く未知の国、一人で派遣された私の任務は、ウズベキスタンは日本が援助するに値する国かどうかを調査・報告することである。援助するか否かは、私の報告次第で決まる。私はそんな重大な責任の重い任務を負って来ている。」まずはこれだけの内容を３回に区切ってニルファルに通訳してもらった。ニルファルは初めての通訳であったのではないか。大変であったに違いない。



私のこの発言の後、クチュクバエフも区切ってニルファルに通訳させて話すようになり、以後和やかな話し合いが出来たと記憶している。

次に思い出したのは、農業経営高校から転出して４年ぶりに平成８（１９

９６）年４月、校長として赴任した時のことである。学校が始まって拓心寮へ行ったら、三好栄養士さんから、「ここ数年、残飯が多くなって困っているんです。校長先生も頭の片隅に入れておいてください。



赴任されて初めてお会いしてこんなことを言ってすみません」と言われた。農場へ行った時は堆肥舎へ必ず残版の量を見に行った。確かに４年前より増えている。これはいかん。何とかしなくちゃ。その思いが頭から離れることはなかった。

秋になって、愛媛県の校長さんから大洲市のたいき農協でダチョウを飼っていることを聞いた。よしっ、これだと直感した。たいき農協へ頼んで、２月に２羽の雛を輸入して育て、成鳥にして、秋の収穫感謝祭で解体して全校生で食べた。雛から１５０キロの成鳥へ、畜産経営科の生徒が飼育係。愛嬌をふりまくダチョウは全校生の大変な人気者になった。近隣の小学生も見学に来た。私も放課後には毎日農場へ行って指を噛ませて遊んでいると、生徒たちがきゃあきゃあと言って集まってきた。

いよいよ収穫感謝祭、全校生が運動場で輪になって見守る中、生徒代表が金槌で頭を叩いて脳しんとうで気絶させて屠殺、血抜きをした後、畜産加工室へ運び畜産経営科全員で解体実習をした。歩留まり３５．７％、一人当たり１５０グラムの鮮やかなピンク色の肉を運動場で爽やかな秋空の下、各種野菜や豚肉、牛肉と一緒に鉄板で焼いて食べた。



私は会食を始める前に、「食べるとは命を頂くことです。皆さん、ひょうきんで人気者であったあのダチョウを今から食べます。ダチョウの冥福を祈りながら、心して食べましょう」と挨拶した。

これは素晴らしい実践であったと今も自負している。この行事の後、あれ程多かった残飯が殆ど無くなったのだ。１年７ヶ月かかって、やっと残飯問題が解決したのだった。

（令和８年１１月１日）